

シンポジウム「学問の世俗性と宗教言説」

提題者等紹介

- 提題者： 杉本隆司（明治大学専任講師）
須藤孝也（一橋大学非常勤講師）
間永次郎（日本学術振興会特別研究員・東京大学大学院）
- 特定質問者： 深澤英隆（一橋大学教授）
- 司会・趣旨説明： 坪光生雄（一橋大学大学院博士課程）

シンポジウムの趣旨説明

神学に絶交を言い渡して以来、近代の諸学問は宗教についてどのように語ってきたらうか。一種の礼儀作法として学者たちにしばしば求められるのは、何であれ「宗教」と呼びうる独立的対象の存在を前提した上で、それに対して公正で他意のない、純粋に知的な関心をもってあたることだったかもしれない。もちろん学者たちは、ときに宗教に対する各種の批判や、場合によってはなお率直な軽蔑をも隠そうとしない。あるいはまた、近代文化が喪失してしまったように感じられる何かを補完すべく、宗教のなかにまだ使えそうな廃材を探しにいく者の姿も散見される——このリサイクルの工程で学者たちがそれぞれの個性を発揮するのは、解釈の創意工夫によるその剔出と洗浄の手際である。いずれにしても、多くの者にとって気がかりなのは、宗教と世俗、近代とそれ以前、信と知、反省性と素朴さといった両項を分かつ一連の切断線がきちんと維持されているかどうかということである。「他者学としての宗教学」という自己規定は、この厄介な境界管理の実務を反省的に引き受けようとする、すぐれて近代的な職業上の態度表明と見て取れる。

「宗教および諸宗教に関する近代の言説は、当初より——つまり皮肉な意味も込めて、生来的に——世俗化の言説であり、かつまた明らかに他者化の言説だったのである³」。宗教という「他者」を設定することなしには、近代は世俗的な自己の同一性を工作できなかつたと言い換えることもできる。だが、そのときまさに他者として固定され、その都度廃棄されながらもいつそう精緻に細部を描き込まれていく「宗教」とは何であろうか。仮にそうした言説を生成し続ける装置の全体が問題の多いものなのだととしても、何に照らして、何を抛り所としてそれ

³ 増澤知子『世界宗教の発明——ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説』秋山淑子・中村圭志訳、みすず書房、二〇一五年、四一頁。

2018年5月16日発行

を批判すればよいのか——このとき、西洋植民地主義の暴虐と土着的に生きられる宗教的生の無垢な本性なるものとの対照はどのくらい役に立つだろうか。あるいはより根本的な批判のために、宗教と世俗との概念的区別そのものを手放してみたところで、ではそのとき学者は何についてどのように語ればよいのか。

「ポスト世俗的」という流行りものの時代診断をどの程度まで真に受けるべきかというところでは意見が分かれるだろう。しかし、いまみたような一連の問いが——他の多くの問いと並んで——いささか飽きがかかるほど頻繁に提起され続けているのが、今日の宗教言説を取り巻く現実の状況であることに変わりはない。私たちはこれらの事情を視界に捉えながら、学究の関心も方法も対象も大いに異にする提題者たちとともに、本シンポジウムを通じて、学問的言説における宗教と世俗との錯綜した関係を辿りなおすためのより繊細な議論を開始したいと思う。

本企画の提題者である三人の研究に共通することのひとつは、明瞭な「宗教／世俗」の概念的分割に即して位置づけることの難しい対象を扱っているという事情である。提題では、個別の研究の内容に関する議論を深めた上で、そうした対象に向かう自身の研究者としての態度についても反省的な検討を加える。そして、「世俗的」な学問は「宗教」についてどのように語るのかという冒頭に掲げた問題提起に、各提題者それぞれの研究の立場から応答を試みる。